「ルーシ」に関するイブン・ホルダドベーの記事について

木崎良平

【要約】九世紀中頃のアラビア作家、イブンホルダドベーは、その著『道里記・郡国志』の中で、次の如く述べている。「ルーシ商人はサカリバの一種族である」と。いわゆる「ルーシ問題」における反ノルマニストは、この「サカリバ」をスラヴ人だけを意味するものとなし、ホルダドベーはルーシがスラヴ人であったとはつきり言つていると主張する。しかし、「サカリバ」がスラヴ人のみを指すのであれば、ホルダドベーの記事は他のアラビア作家たち、たとえば、イブン・ファドラン、イブン・ロステー、マスウーディ、イスタクリ、ガルデーヂなどの説く所と矛盾する。この場合、われわれはホルダドベーを確実なものと見なし得ないであろう。またもし、「サカリバ」がもつと広い意味内容を持つのであれば、われわれはホルダドベーの記事が、ルーシ＝スラヴ人という等式を証明するものではないと言い得よう。

一

九世紀の中頃、古代のメディナであるジバルの駅長であつたイブン・ホルダドベー[1]は、その職務上から得た知識でもつて、有名な『道里記・郡国志』(Kitab-al-Masalik Wal-Mamalik)[2]を書いた。その中で、彼は当時の「ルーシ」の通商路について、次のように述べている。[3]

「スラヴ人の一種族であるRūsiyun（ロシヤ）[4]商人の通商路についていえば、彼らは海狸の毛皮や黒狐の毛皮に剣をスラヴの地の最も奥からローマの海（東地中海）[5]に運びこんで売る。そこでビザンツの王は、その商品に十分の一税を課す。

さもなくば彼らはスラヴの河テニスを下つて、ハザールの主邑ハムリヂのそばを通り、[6]ここでこの町の長に十分の一税を課せられ、つぎにさし渡し五百ファルサク[7]もあるジョルジアの海（カスピ海）

に出て、自分の行こうと思う岸に向う。またしばしば彼らのあるものは、商品をらくだに乗せて、カスピ海からバグダッドに輸送する。〔此所で〕スラヴ人の奴隷が彼ら商人の通訳をする。そしてロシヤ商人がナサーラ（キリスト教徒）[8]のままで〔改宗せずに〕許される場合はヂズヤト（人頭税）を支払わねばならぬ。

彼ら（ユダヤ商人）[9]の陸上通商路についていえば、彼らの中でスペインから出発するもの、あるいはフランク王国から出発するものは〔まず〕スース・アクサに行き、タンジア〔タンジール〕に向い、それから、イフリキア、ミスル（エジプト）、ラムラ、ディマスク（ダマスク）、クーファ、バグダッド、バスラ、アフワズ、ファリス、キルマン、シンド、ヒンド、支那へ〔と次々に〕旅を続ける。

またしばしば彼ら[10]はスラヴの村々を通つてビザンツ帝国の後側（北方）の路を取り、ハザールの主邑ハムリヂに行き[11]カスピ海を渡つてバルクに達し、河向うの地（トランスオクシアナ）を越えてトゥグズグルのウルトに旅をつづけ支那に達するのである。」と。

この記事は、史料の少ない九世紀当時のロシヤの事情を述べたものとして、初期キエフ・ロシヤ史研究のための貴重な史料と見なされて来た。と同時に、この記事の邦訳者藤本勝次氏が Rūsiyun をロシヤと註釈[12]しているように、「ルーシ」とはロシヤ人のことであり、スラヴ人であると受けとれるような記述である点において、注目されるものである。本稿の目的は、こうした注目すべきホルダドベーの記述について、一体その中の「ルーシ」という言葉が何を意味しているかを検討することである。

ところで、この記事における「ルーシ」という言葉を解明し、初期ロシヤ史研究の中心問題たるいわゆる「ルーシ問題」について、解決の一端を探り出す前に、説明しておきたいことがある。それは、先に引用したホルダドベーの記事の邦訳についてである。

まず、邦訳者藤本氏は、「ルーシ」という言葉を「ロシヤ」と註釈しているが、これには賛成し難い。なるほど、ロシヤという称号は「ルーシ」という言葉から出たと一般に考えられているが、現在われわれの使つているロシヤなる概念が成立したのは、九世紀よりずつと後世のことで、早くとも、モスクワ公国による北東ロシヤ統一以後のことと思われる。こうしたロシヤなる概念の成立の時期はともかくとして、「ルーシ」という言葉が、時代と共に種々異つた意味内容を持つて来たことが指摘されねばならない。[13] 換言すれば、ホルダドベーの記事中の Rūsiyun は「ロシヤの」と訳されてはならない。

次に、ローマの海であるが、これは東地中海でなく、黒海ではなかろうか。ホルダドベーは、地中海を西の海、紅海を東の海と書いて居り[14]、それらの記事につづいてすぐローマの海、つまりローマ

（ギリシア）の海とあるのであるから、これが地中海を指しているとは考えられない。実際、多くの史料において、黒海はローマの海と記されているのであり[15]、ビザンツ帝国は一般にローマ帝国という名称で知られていた[16]。

第三に、ハザールの主邑ハムリヂの箇所であるが、この部分は種々に訳される。たとえば[17]、Barbier de Meynard によれば、「スラヴの河を船で下つてハザールの町を通る支流を横ぎり……」とある。つまり、テニスという語が船（sufun）に、ハムリヂ（Khamlidj）が支流（khalidj）と解されているのである。また De Goeje はテニス河をタナイス河つまりドン河と解しているが[18]、Josef Marquart は Tin とし[19]、Togan, A.Z.V. は Etil と読んでいる[20]。ヒティル河といえば普通、ヴォルガ河を意味するから[21]、この箇所は「ルーシの商人」がヴォルガを下つてやつて来たことになる。なお後世の地理書では、「スラヴの河」という語はなくなり、「ルーシの河」と変形しているが[22]、「ルーシの河」とは普通にヴォルガ河のこととも[23]されるのである。とすれば、トガンの見解をこれと合すると、この箇所は、「ルーシの河、ヴォルガを下り……」となる。ところで、ハザールの町については、イティル、セメンデル、バランヂャル、サルケル等が知られ、その位置も判明しているが、ハムリヂについては、その位置がまだ分つていない[24]。このように考えると、ハムリヂなる町が存在せず、ホルダドベーの記事のこの部分は、支流（khalidj）と理解する方が適当かとも思われる。

第四に、藤本氏が、「彼ら」という所に、ユダヤ商人と註解している箇所である。同氏は De Goeje の解釈に従つているわけであるが、一方、次のように註を施している[25]。「これはロシヤ商人を指すとも取れ、イスラム百科事典Ⅲ一一八一頁のルーシの項にも、ロシヤ商人の路として、ここの記事が出ている」と。確かに、ホルダドベーの記事を読み流して行けば、この節と、次の節の始めの方に出て来る「彼ら」という人称代名詞は、ルーシの商人（ロシヤ商人ではない）とも取れるので、本稿では、この部分をも一応、ホルダドベーの「ルーシ」の通商路に関する記事として附け加えたのである。ただし、この「彼ら」が何を意味するかは後述することにする。

二

さて、前にも述べた如く、ホルダドベーのこの「ルーシ」の通商路に関する記事は、「ルーシ」とはスラヴ人のことであるように受け取れる点で、特に注目される。すなわち、前掲の記事の冒頭にある、

「スラヴ人の一種族であるルーシの商人」という箇所と、

「彼ら（ルーシ）のあるものは……バグダッドに商品を輸送する。

〔ここで〕スラヴ人の奴隷が彼ら（ルーシ）の通訳をする。」

という箇所を読めば、「ルーシ」とはスラヴ人の一種族で、スラヴ語を話した種族であることが肯定されるようである。

実際、「ルーシ問題」において、「ルーシ」＝スラヴの図式を取り、「ルーシ」＝ノルマンの等式に反対する人々は[24]、このホルダドベーの記事を特に重要視するのである。そしてこの記述を楯に、「ルーシ」とはノルマン人であると伝える他の記事を斥ける。たとえば、「ルーシ問題」におけるノルマン説の中心文献たる『ロシヤ原初年代記』の記事を否定する。すなわち、『原初年代記』において、「ルーシ」という言葉は種々の意味をもつているようではあるが[25]、次の箇所などについて言えば、「ルーシ」とはヴァリャーグ人、つまりノルマン人であることが明瞭であり、反ノルマニスト達はこの記事を誤りとして斥けるのである。

彼らの斥ける『原初年代記』の記事とは、その六三七〇年（八六二年）の、いわゆる『ヴァリャーグ諸侯招致の物語』中の次の箇所などである[26]。

「（チューヂ、スロヴェン、クリヴィチ、およびヴェーシは）、海の向うへヴァリャーグ人、ルーシのところへ行つた。これらのヴァリャーグ人はルーシと、ちょうど、他のものがスヴェイ、他のものがウルマーネ、アングリャーネ、他のものがゴートと呼ばれる如く、これらもまたかく呼ばれた。」

ここでは明瞭に「ルーシ」＝ノルマン人の等式が成立する。実に、こうした『年代記』の記述が、そもそも「ルーシ問題」の発端であつた。ところで、『年代記』は初期ロシヤに関する自国の唯一の史料ではあるが、十一世紀の中頃から編集され始め、十二世紀の始めに集成されたものである。その点、二世紀以上も前のことを正確に叙述することは困難であつたに違いない。事実、『諸侯招致の物語』などは、多分に深い伝説的な霧に包まれて居り、そのまま、信用することは出来ない。そこで、たとえ外国の史料であつても、同時代の、つまり九世紀の史料が、『年代記』と別のことを述べているとするならば、われわれとしては、その方を信用しても良いであろう。こうして、もしホルダドベーによつて、ノルマン説の中心文献たる『年代記』を否定することが出来るなら、ノルマン説は少くとも重大な打撃を受けることになろう。

しかし、『年代記』の問題はさておいて、ホルダドベーの記事はどれ程確実性があり、その記事中の「ルーシ」は果してスラヴ人を指すのであろうか。これが最も肝要な問題である。

第一に、ホルダドベーの記事は、原典の形においてでなく、後世の地理学者、たとえば十世紀後半の無名のペルシア人や[27]、十一世紀のペルシアの歴史家ガルデージ[28]などによつて伝えられていることが

指摘されねばならない。その間に、ホルダドベーの記事は、圧縮や変容を蒙ったのである。[21]

第二に、彼はジバル、あるいはその他の駅逓局に勤務し、ロシヤの地を訪れたことがなかつた人物である。当時、東スラヴ人の住んで居た土地、ドニエプル地方はアラビア人にとつて、極めて遠い未知の地方であつた。アラビア商人は、ヴォルガの中・下流まで往来したが、それ以上の奥地に進んだことはなかつた。十世紀の地理学者イスタクリが九五三年に書いたといわれる『郡国志』(Viae regnorum) にも次の如くある。[22]

「(ルーシの第三の居住地) アルタへは誰も行かない。というのは、そこの住民は他国人をすべて殺し、水の中へ投げ入れるからである。それ故、誰も彼らのことについて知らないし、彼らは誰とも接触をもたない。」と。

同じく、有名な十世紀のアラビヤ作家マスウーヂは、その著『黄金の牧場』(Muruj al-dhahab) の中で、次の如く述べている。[23]

「ハザール人の河 (ヴォルガ) はその上流に、ルーシの海たるナイタスの入江に接合する源流をもつている。誰もそれを航行したことはなく、ルーシ人はその岸の一つに住んでいる。」と。

「ナイタス」とは黒海のことであるが、この場合、黒海がルーシの海と呼ばれたかどうかは別として、マスウーヂがヴォルガ上流を誰も航行したことがないと言つている点は注目されねばならない。アラビア人はこうして、ヴォルガ上流、ドニエプル上流域については、直接にではなく、間接的に聞き知つていたのみである。また、アラビア人は、彼らより東スラヴ人に関してよく知つていたビザンツの史料を利用したであろうから、東スラヴ人に関する史料としては、アラビア史料よりも、ビザンツ史料の方が高く評価されねばならない。従つてビザンツ史料によつて、たとえば九世紀のフォチウスの『ルーシの襲撃の際の説教』(In Rossorum Incursionem Homiliae) や『書簡』(Epistolae)、十世紀のコンスタンチン・ポルフィロゲニトスの『帝国行政』(De Administrando Imperio) などによつて、「ルーシ」とはノルマン人であることが証明されるならば、われわれはこの方に従わねばなるまい。こうしたギリシア史料における「ルーシ」の検討は、別の機会に譲るとして、ともかく、スラヴ人に関するアラビア史料を余りに高く評価することは、警戒を要する。ホルダドベトもその例外ではない。

三

以上、ホルダドベーの記事は、原典の形で伝えられたものでないこと、また直接的なものでなく、間接的なものであることを示したが、これらのことを除外しても、なおかつ、ホルダドベーの記事が、

「ルーシ」＝スラヴ人を証明するものではないと考えられる点がある。

まず、ホルダドベーの記事中、一応「ルーシ」＝スラヴ人という等式を示していると見られるものは、その冒頭の一条だけであり、もう一か所の部分は、パスケヴィチも示すように[34]、「ルーシ」がスラヴ語を知っていたということだけを言っているに過ぎない。

従って、問題は冒頭の一条だけである。つまり、「サカリバ（Saqaliba）の一種族であるルーシの（Rusiyun）商人」という条だけである。

サカリバとは一体何を意味するのか、普通にそれは中世アラビア地理学者達が、スラヴ人を指す場合に用いた語とされる。[35]事実、次のような記事などでは、サカリバはスラヴ人と解して良い。すなわち、十一世紀前半のアル・ビルニ（973—1048）はバルト海について、サカリバの国から北方へ、ヴォルガ・ブルガール人の方向へ伸びている湾と言っているような条である。[36]また先にも引用したイスタクリは、ルーシ人の中心として、サクラブ（Saqlab, これは Saqaliba の単数）、クヤバ、アルタの三つを挙げているが、[37]その場合、サクラブとはスラヴ（イリメン・スラヴ）の地、つまりノヴゴロドを指すと見られている。[38]

しかし、パスケヴィチが、ヴェストベルグ、[39]サヴィトネヴィチ、[40]リャプスキン、[41]マヴロディン[42]の説を引用しつつ、主張するように、「サカリバ」という語は、スラヴ人だけでなく、もっと広くロシヤ地方に住む住民を意味したようである。

たとえば、十世紀の始め、アラビア・アッバス朝の外交使節として、九二一—二二年、ヴォルガ・カマ流域のブルガル王国を訪れたイブン・ファドランは、その『旅行記』（Kitab）の中で、次のように述べている。[43]

「サカリバの王は、われわれを迎えるため、王の権力に服従している四人の王と、彼の兄弟、息子を遣わした。」と。

このサカリバ王とは、『ヴォルガ・ブルガール史の研究』の著者、梅田良忠氏も示す如く、[45]ヴォルガ・ブルガールの王のことであろう。ここでは明らかにスラヴ人でないものが、サカリバと呼ばれている。このように考える時、「サカリバの一種族ルーシ」というホルダドベーの条は、ルーシ＝スラヴの等式を必ずしも証明するものではない。

なお、イブン・ファドランにおける「ルーシ」に関する記事を検討することは、本稿の目的圏外に属するから、詳述しないが、彼は明瞭にルーシ人とスラヴ人を区別している。たとえば次の条の如くである。[46]

「スラヴ人は賤しくハザール人の宗主権を認め従属しているが、ルーシ人は大なる力を持つ勇猛の、充分武装した人々で、他の種族

に対抗している。」

またルーシ人については次のように述べている。[17]

「彼らは（ルーシ人）しゆろの如く背が高く、赤い顔をし、赤い髪を持っている。」と。

ファドランにおけるルーシ人は、スラヴ人でなく、ノルマン人を指しているようである。従つて、一歩譲つて、サカリバがスラヴ人のことであるとしても、「サカリバの一種族ルーシ」というホルダドベーの記述をそのまま認めることはできない。ファドランは直接、ヴォルガ・ブルガル国を訪れているのであり、ホルダドベーは間接の報告によつて、その記事を書いているからである。われわれとしては、ファドランの方をより信用するのが妥当であろう。まして、他のアラビア作家達も、ルーシ人とスラヴ人を区別し、両者を同一視していないとすれば、われわれはホルダドベーのこの記事を承認することは出来ない。他のアラビア作家における「ルーシ」の解明は、別の機会に譲るが、一・二、例を挙げれば次の如くである。

すなわち、かのマスウーヂも『黄金の牧場』の中で、

「ヤペテの子孫と考えられる種族に、ルーシとスラヴ人があり、彼らはハザールの軍隊に勤務していた。」

と、述べて、ルーシとスラヴを区別している。[18]

あるいはまた、十世紀の始め、九〇三年頃、『歴史・地理綜合百科辞典』(Kitab al-Alak an-Nafisa) を書いたイブン・ロステーも次のように記し、ルーシをスラヴ人と区別している。[19]

「ルーシは舟でスラヴ人を襲い、捕えて捕虜とし、ハザール人やブルガル人のもとに連れて行つて、彼らを売り渡す。」と。

四

以上、述べ来つたのは、「サカリバ」がもしスラヴ人だけを指すのであれば、イブン・ホルダドベーの「サカリバの一種族ルーシ」の記事は承認できないこと、「サカリバ」がもつと広い意味内容を持つのであれば、その記事はルーシ＝スラヴ人という等式を証明するものでないことであつた。

ところで、本稿の始めに掲げたホルダドベーの記事の第三段、および第四段の始めにある「彼ら」という人称代名詞の問題である。この「彼ら」は、先にも示した如く、「ルーシ」とも「ユダヤ人」とも取り得るのであるが、藤本氏が註解するように、[20]「内容から見てユダヤ商人と解釈するのが穏当である」面もある。

第一に、ホルダドベーの「ユダヤ商人とルーシ商人の旅程」の記事全体を見ると、始めにユダヤ商人の海上通商路、次にルーシ商人の通商路が述べられ、問題の第三段以降はユダヤ商人の陸上通商路が述べられていると、考えられることである。

第二に、「サカリバ」をスラヴ人と解し、さらに藤本氏の如く、ルーシをロシヤ人と解するならば、彼らが第三段以降に述べられているような広範囲な商業活動を行つたとは考えられないということである。

第三に、もしルーシがスラヴ人であるならば、第四段の「彼ら」をルーシの商人とした場合、意味が通じなくなることである。すなわち、「スラヴの商人はスラヴの村々を通つて……」という風になることである。

しかし、第一の点はともかくとして、第二、第三の点は、ルーシ＝スラヴという等式を承認した上での話である。従つて、もしホルダドベーの「サカリバの一種族ルーシ」という条の「サカリバ」がスラヴ人のみでなく、もつと広範囲な意味内容を持つものであり、「ルーシ」がファドランの示す如くノルマン人を指すのであれば、話が違つて来る。

第一に、少くとも第四段の「彼ら」を「ルーシ」とも解釈することが許されよう。この第四段に示されている通商路の順序は、(1)スラヴの村々、(2)ハザールの国、(3)バルク（カスピ海の東方）である。この順序において、商人達の出発点として考えられるのは、アラビアではなくて、「スラヴの地の最も奥」にあるルーシの住地か、第三段に見えるスペインまたはフランク王国である。そのいずれが適当かは後述するとして、ともかく、この「彼ら」が「ルーシ」と考えることも出来るのは認められよう。そして、その場合、ルーシ＝スラヴ人として、この「彼ら」を「ルーシ」と解釈した場合に生ずる矛盾は無くなり、文章の意味も通じよう。

第二に、もしルーシがノルマン人であるならば、彼らの広範囲にわたる商業活動は認められているから、先に述べた如く、ルーシ＝スラヴとし、スラヴ人が広範な商業活動を行わなかつたという理由で、これらの「彼ら」を「ユダヤ人」と考えた方が良いという理由も薄弱となる。

第三に、ホルダドベーの記事自体の調子から行けば、第三段、第四段の「彼ら」は「ルーシ商人」とも考えられぬことはない。この場合、ホルダドベーの「ユダヤ商人とルーシ商人の旅程」全体は、(1)ユダヤ商人の通商路、(2)ルーシ商人の通商路の順序で書かれていると考えられる。

つまり、ホルダドベーの記事の第三段、第四段の「彼ら」は「ユダヤ商人」とも、「ルーシ商人」とも考えられる訳である。それでは、いづれを取るのがより妥当であろうか。

記事自体の調子から言えば、ルーシ説が妥当ではあるが、全体の叙述を考える時、それを(1)ユダヤ人の旅程、(2)ルーシ人の旅程と考えるのは無理であり、(1)海上通商路、(2)陸上通商路と考えるのがよ

り妥当で、その場合、海上活躍民族たるノルマン人（ルーシ人）を陸上通商路の主体者と解釈されるようなルーシ説は妥当でない。特に第三段の北アフリカ陸上通商路の主体者たる「彼ら」を「ルーシ」と見なすのは妥当でない。

しかし、第四段の「彼ら」について言えば、それが陸上通商路について述べている点、またバルクからさらにシナにまで達すると述べている点から、「ユダヤ商人」――ただしスペインまたはフランク王国から出発するユダヤ商人と解釈するのも妥当ではあるが、ルーシ説もかなり有力となる。

第一に、ユダヤ商人の中央アジアを通る陸上通商路について言えば、まずバグダッドからカスピ海―バルク―トランスオクシアナ―シナの旅程が述べらるべきであろう。つまり南からカスピ海に出る旅程である。しかし、ここでは、前にも示した如く、むしろ北からカスピ海に出る旅程が述べられている。これは一応ルーシの旅程を意味しているとも考えられる。

第二に、ノルマン人は海上活躍民族であるといつても、彼らは連水陸路により、河から河へ、海から海へと、内陸深くまで浸透したことが考えられねばならない。まして、らくだに乗つてバグダッドまでやつて来た商人達について、ホルダドベーが、その商人達もまたユダヤ商人と同様、カスピ海の東方にも出入すると考えたとしても不思議ではない。ホルダドベー自身、ルーシが「カスピ海に出て自分の行こうと思う岸に向う」と言つている。当然ホルダドベーは、ルーシがカスピ海の東岸にも上陸し、バルク方面にも向うと考えたろう。

第三に、ホルダドベーの記事の第三段の「彼ら」を「ユダヤ人」と考えるなら、第四段の「彼ら」も文章の調子から、「ユダヤ人」と考えるのが妥当だということであるが、問題は調子ではなくて、内容である。つまり、第三段の「彼ら」は文章の調子から言えば、「ルーシ」と考えられるが、内容から言えば「ユダヤ」と解する方が適当であるように、この第四段の「彼ら」は文章の内容から、「ルーシ」と考えることも可能だと主張したいのである。

従つて、もし、これらの「彼ら」が、少くとも第四段の「彼ら」が、「ルーシ」と考えられるなら、ホルダドベーの「サカリバの一種族ルーシ」の条の「サカリバ」は広い意味内容を持ち、スラヴ＝ルーシの等式を証明するものではないと言わねばならない。ただし、念の為にいうならば、この「彼ら」が「ルーシ」でないとしても、先に述べた如く、「サカリバ」がもしスラヴ人だけを指すのであれば、ホルダドベーの記事はそのまま認め難いこと、「サカリバ」がもつと広い意味内容を持つたものである可能性があること、は動かない所である。

五

さて、われわれの次の問題は、このホルダドベーの記事によつて、「ルーシの住地」がどこであつたと、考えることが出来るかということである。

この問題に関して、ヴェルナドスキーは次の如く述べている。[52]

「ホルダドベーの仏訳者[53]は、ルーシの商人達は『ドン河を下り』と訳しているが、原文にはドン河の道を『行き』（sarīd）とあるだけである。ルーシの商人達はアゾフ海から流を遡り来ることを常としたのであり、北から流を下つたのではないことは殆んど確かである。」

彼は、このように述べて、ルーシの国が、アゾフ海沿岸のトムトロカーニであつたと主張し、それが北方、すなわちノヴゴロドであつたとする説に反対する。

ルーシの国がどこであつたかの問題は、ホルダドベーの記事からだけではなく、もつと種々の史料から検討する必要があるから、稿を改めて叙述することにするが、ホルダドベーの記事だけについて言つても、このヴェルナドスキー説は全く承認し難い。

第一にホルダドベー自身、ルーシの国は「スラヴの地の最も奥」にあると述べているのと矛盾する。

第二に、もしルーシがアゾフ海沿岸からドンを遡つたのであれば、ドンとヴォルガの最も接近する地点より南に、つまりドンの下流にあつたハザールの町サルケルについて、ホルダドベーは言い及ぶべきであつた。ホルダドベーの記事が何時頃書かれたかについては種々異論があり、学者間に一致を見ていないが、[54]ほぼ九世紀の中頃と考えられている。[55]一方サルケルは八三三年頃に建設せられたのである。ヴェルナドスキーは、ホルダドベーがサルケルに触れず、ハムリヂについてのみ記しているのは、ホルダドベーが古い史料を用いたからだと述べているが、[56]これは全くの推論にしか過ぎない。その上、ヴェルナドスキー自身、後年同様な主張を展開している書物[57]において、このハムリヂ問題には一言も触れていない。これは彼のハムリヂ問題についての自信のなさを示すものではなかろうか。

第三に、もしルーシの国がアゾフ海沿岸にあつたとしたら、ルーシはどうしてドンを遡つて、迂廻してバグダッドに達する必要があつたのであろうか。ヴェルナドスキー自身、サルケルはハザール人がルーシに対抗して建てた要塞と考えている。[57]わざわざ敵対国を通る迂廻路を取る必要が、ルーシには無かつたろう。クバン河がトムトロカーニに注いで居り、クバン河からクマ河、あるいはテレク河、クラ河によつて、カスピ海に出れるのである。ヴェルナドスキーによれば、[58]ルーシとハザールの敵対関係は七八七年来のことである。

とすれば、ホルダダドベーの記事はそれ以前の状態を反映しているとでも言うのであろうか。

ホルダドベーの記事だけについて言えば、ルーシの国は、ドン河、またはヴォルガの上流で、スラヴの地の最も奥にあつたと考えるのが妥当であろう。つまり、「テニス」と読まれる箇所が、ドン河であろうと、ヴォルガ河であろうと、ルーシはそれを下つて来たのであるから、それらの上流域がルーシの国と考えるのが妥当であろう。

この場合、思い起されるのは、『原初年代記』の次の記事である。すなわち、本稿の始めでも引用した、ルーシ＝ノルマン人たるたとを明瞭に示している八六二年の条である。そこには先の引用文につづいて、次の如くある。[59]

「チューヂ、スロヴェン、およびクリヴィチまたヴェーシは、ルーシに言つた。『……来りて公治し、我らを支配せよ』と。しかして三人の兄弟が己の氏族と共に選ばれ、自らすべてのルーシをひきつれて来つた。……それらのヴァリャーグ人からノヴゴロドはルーシの地と呼ばれた。」

この箇所はさらに、同じ『年代記』の次の条によつて確証される。[60]

「ルーシからヴォルガに沿つてボルガル人およびフヴァリス人（カスピ海沿岸の住民）の所に行き、そして東へシムの割当て（メソポタミア方面）にまで行き、一方ドヴィナに沿つてヴァリャーグ人の所へ、ヴァリャーグからローマまで、ローマからまたハムの種族の所まで行くことが出来る。一方ドニエプルは多くの河口を通つてポントス海へ流れ入るが、この海はルーシの海と聞えて居る。」

正に、ここに述べられているルーシの地とは、ヴォルガ、西ドヴィナ、ドニエプルの、従つてドンの上流域である。ホルダドベーの記事にあるルーシの国と考えられるものと、全く良く符合する。なお、パスケヴィチは、『原初年代記』のこの部分に見える「ルーシの海」(Russkie More) は「ローマの海」(Rumskie More) と元来書かれていたのではないかと考えるが、[61] この問題は前にも述べた如く、後に考究するとしても、もしパスケヴィチの主張する如くであるならば、ホルダドベーにも黒海は「ルームの海」と書かれて居り、両者は全く良く符合するのである。

換言すれば、ホルダドベーの記事は、『原初年代記』の記事と矛盾するどころか、一致さえしているのである。まして、イブン・ホルダドベーの記事は、ルーシ＝スラヴ人の等式を証明するものではない。

① イブン・ホルダドベーについては、藤本勝次「イブン・コルダードベ『ユダヤ商人とロシヤ商人の旅程』翻訳」、『東洋史研究』第十一巻、五・六号六二頁註①に挙げられている文献、すなわち、

Encyclopaedia of Islam, 1927, II, P. 398

C. Huart; Literature Arab, 1923, P. 295
Brockelmann; Geschichte der Arabischen Literature, I, P. 225
Journal Asiatique 1865 V, Barbier de Meynard; Livre des Routes et des Provinces par Ibn-Khordadbeh, P. 9
De Goeje, ed.; Bibliotheca Geographorum Arabicorum, VI, 1889 序文、および、木崎良平、初期キエフ・ロシヤ史の為の史料、鹿大史学第六号、六九―七〇頁など参照のこと。

② ホルダドベーの「道里記・郡国志」については、木崎、前掲論文、七〇頁参照。

③ 藤本前掲論文、六一―六二頁より引用。藤本氏は De Goeje の前掲書中のテキストから翻訳している。De Goeje, op. cit., pp. 153～155

④ 本稿で後述する如く、ロシヤと訳するのは誤り。「ルーシの」と訳すべきである。

⑤ これも後述する如く、「黒海」と訳すべきである。

⑥ この箇所は B. de Meynard の前掲書、Journ. Asia. P. 116 の如く、「スラヴの河、テニスを下つて、支流を横ぎり、ハザールの町へ行く。」と解するのが適当かも知れない。ただし、メイナールは「スラヴの河を舟で下り、」としている。なお、この箇所については、S. Rapoport; Mohammedan Writers on Slavs and Russians, The Slavonic and East European Review, VIII, 1929, P. 81 参照、テニスとはタナイスとギリシア人が呼んだ河で Herodotus, Historiae, IV, 57, (青木巌訳、(上)三六九頁) などから推測される如く、ドン河のこと。

⑦ ファルサクとは一時間に馬が速歩で行く距離のこと。アラビアでは五七六二・八メートル。Encycl. of Islam, II, P. 70 藤本前掲論文、註⑫参照。

⑧ ナサーラ問題については稿を改めて述べる。

⑨ 後述の如く、この「彼ら」はユダヤ商人でよいが、ルーシ商人とも取れる。

⑩ この「彼ら」は⑨と同様であるが、自分は「ユダヤ商人および「ルーシ商人」と考えたい。

⑪ この箇所の解釈については⑥参照のこと。

⑫ 藤本前掲論文、六一頁

⑬ これは一般に認められている。例えば、Kluchevsky, Kurs russkoi istorii, 外務省調査局訳、昭和二一、第一巻、一七四頁、なお、「ロシヤ」の概念の成立については Stender-Petersen; Russian Studies, Chapt. 3, The Origin of the Russian Ethnic Names, especially, pp. 40～43. 1956, Kobenhavn. なお、チホミロフは、「ロシヤという名称が十八世紀のはじめ、すなわちロシヤ帝国の形成期にやつと認められたというのが暗黙の了承である」と言つている。M. N. Tikhomirov, O proiskhodzdenii nazvaniya "Rossiya", Voprosui Istopii, 1953, No. 11, P. 93.

⑭ ホルダドベー藤本訳六〇頁、De Goeje, op. cit., P. 153

⑮ A. Freiman, Nazvanie Chernogo morya v domusulmanskoi Persii, Zapiski Kollegii Vostokovedov pri Aziats-

kom Muzee Akademii Nauk SSSR, V, 1930, P. 649 seqq.; A. Yakubovsky, Ibn-Miskaveikh o pokhode Rusov v Berdaa v 322g.=943/4g., Vizantiiskii Vremennik XXIV, 1926, pp. 83–4; V. Bartold, Arabskie izvestiya o rusakh, Sovetskoe Vostokovedenie I, 1940, P. 21; A. Vasiliev, The Russian Attack on Constantinople in 860, The Medieval Academy of America, XLVI, 1946, P. 58、その他。これはPaszkiewicz, H.; The Origin of Russia, 1954, P. 420, note 5 より引用。

⑲ F. Dölger, Rom in der Gedankenwelt der Byzantiner, Zeitschrift für Kirchengeschichte, LVI, 1937, pp. 1–42; idem in Studi Bizantini e Noellenici, V, 1939, pp. 152–3. Cf. Paszkiewicz, op. cit, P. 420.

⑳ B. de Meynard, op. cit., P. 116.

㉑ De Goeje, op. cit., P. 154

㉒ J. Marquart; Osteuropäische und ostasiatische Streifzüge, 1903,

㉓ T. Lewicki; Zrodla arabskie do dziejow Slowianszczyzny, pp. 133–7, quoted from, Vernadsky, The Origins of Russia, 1959, P. 320 note O.

㉔ ハザール人の町、ヴォルガ下流のItilに因んで、ヴォルガ河はかく呼ばれた。

㉕ Encycl. of Islam III, P. 1181. 藤本前掲論文、註⑲参照。

㉖ V. Minorsky; Hudud al-Alam, 1937, pp. 41, 75, 216–218, 316; Cf. Vernadsky; Ancient Russia, 1946, P. 97 なお、Vernadsky はドン河がルーシの河と呼ばれたと考える Vernadsky; Ancient Russia, pp. 97, 259.

㉗ Vernadsky; Ancient Russia, P. 215.

㉘ 藤本前掲論文、註㉕

㉙ いわゆる「ルーシ問題」においてスラヴ説を取る人々、特に現ソヴェト史学者たち。たとえばグレコフ、チホミーロフ、リハチョフ等で、ここから、「ルーシとは東スラヴ人に占められていた一地方の住民の名称であつた」等といわれる。Pankratova, A. M.; Istoriya SSSR, 1953, tom. I, P. 40, 邦訳、三上・江口監修、『ロシア古代中世史』、一九五四、四七頁。

㉚ 原初年代記における「ルーシ」については別に考察したい。その若干のものについては、次のような拙論中で触れた。『「ルースカヤ・ゼムリャー」という言葉についての覚え書』、『鹿大史学』第四号、昭和三一、『「順番制度」について』、I、II、『鹿大文理紀要』第七・八号、昭和三三—四、『「イーゴリ遠征物語」における「ルーシ」という言葉について』、『史林』四三の五、昭和三五、「ロシヤという称呼」、『ロシヤ史研究』第九号、鹿大文理世界史研究会、昭三一。

㉛ 木崎、『原初年代記考』その一、『鹿大文理紀要』第九号、昭和三五、二二頁、原文は Likhachev, D.S.; Povesti Vremennuikh Let, 1950, I, P. 18. 露訳は同書、二一四頁、英訳は Cross, S. H.; The Russian Primary Chronicle, 1953, P. 59. 邦語除村訳は、除村吉太郎、ロシヤ年代記、昭和二一年、一八頁。

㉙㉚ 木崎、『初期キエフ史料』七〇頁参照のこと。十世紀後半の書とは『世界の境』(Hudud-al-Alam) のこと。ガルデーシのは「叙述の装飾」(Zayn al-Akhbar) のこと。露訳等については拙稿同頁の註を見よ。

㉛ Paszkiewicz; The Origin of Russia, P.118.

㉜ Macartney, C. A.; The Magyars in the 9th Century, 1930, P. 221, イスタクリの『諸国志』については、木崎『初期キエフ史料』七一—三頁参照、なお、この記事については Vernadsky; The Origins of Russia, pp. 197–8, 梅田良忠、ヴォルガ・ブルガール史の研究、昭和三四、九九頁参照。

㉝ マスウーディおよびその『黄金の牧場』については、木崎『初期キエフ史料』七三頁を見よ。なおこの記事については、Paszkiewicz; The Origin of Russia, P. 419 参照

㉞ Paszkiewicz; op. cit. P. 119

㉟ 藤本前掲論文六三頁、註㊱、Encycl. of Islam, IV, P. 77, P. 467

㊱ Lewicki, T.; Swiat slowiański w oczach pisarzy arabskich, Slavia Antiqua, P. 369, See Paszkiewicz; op. cit. pp. 418–419

㊲ 註㉜を見よ。

㊳ 例えば、Vernadsky; The Origins of Russia, P. 198, Paszkiewicz; The Origin of Russia, P. 162

㊴ Vestberg, F.; K analizu vostochnych istochnikov o Vostochnoi Evrope, Zhurnal Ministerstva Narodnogo Prosveshcheniya, 1908, pp. 365–71.

㊵ Zavitnevich, V.; Proiskhozhdenie i pervonachalnaya istoriya imeni Rus, Trudy Kievskoi Dukhovnoi Akademii, 1892, P. 590

㊶ Lyapuskin, I; Slavyano-russkie poseleniya IX–XII vv. na Donu i Tamani po arkheologicheskim pamyatnikam, Materialy i Issledovaniya po Arkheologii SSSR, VI, 1941, P. 234.

㊷ Mavrodin, D.; Drevnyaya Rus, Proiskhozhdenie russkogo naroda i obrazovanie Kievskogo gosudarstva, 1946, P. 97

㊸ Paszkiewicz; The Origin of Russia, P. 119

㊹ イブン・ファドランおよびその『旅行記』については、梅田、『ブルガール史』、木崎、『初期キエフ史料』七一—二頁参照。この記事は Kovalevsky, A.P.; Kniga Akhmeda ibn-fadlana o Ego puteshestvii na Volgy v 921–922g.g., 1956, P. 131 メシェド本二〇三b—四一頁、この項、梅田、『ブルガール史』五六頁より引用。

㊺ 梅田、『ブルガール史』五六頁、および四七頁註(2)。

㊻ Paszkiewicz, The Origin of Russia, P. 11. R. ke- R. Frye; Notes on the Risala of Ibn-Fadlan, Byzantina-Metabyzantina, I(2), 1949, pp. 7–37.

㊼ Andersson, Ingvar; A History of Sweden. Trans. from the Swedish by C. Hannay, 1956, P. 18.

㊽ Paszkiewicz; The Origin of Russia, P. 120,: Mas'udi; II,11

㊾ イブン・ロステーおよびその著『キターブ』については、木崎、『キェフ史料』七二頁参照。C. Macartney, The Magyars, P. 213, Paskiewicz; op. cit., pp. 119, 128, 156, Vernadsky, Ancient Russia, pp. 283-5

㊿ 藤本、前掲論文六五頁、註㉓。

(51) Vernadsky; Ancient Russia, pp. 282-3; idem, The Origins of Russia, P. 192

(52) デ・フーヨのこと。De Goeje, ed; B.G.A. VI, 1889, P. 154

(53) その主なるものを挙ぐれば、メイナールは八五四—八七四年説、(B. de Meynard, op. cit. I, P. 18) ヨールは始め八五一年より数年後、後に九世紀半とす(Yule-Cordier; Cathay and the Way Thither, I, Introduction, P. 109, and Yule; Notes on the Oldest Records of the Sea-route to China. 1882, P. 649. なお八五一年とは、アブー・ザイドの「印度及び支那事情」の前編の書かれた年である。この項、桑原隲蔵、「宋末の提挙市舶使西域人蒲寿庚に就いて」、『史学雑誌』二六の一〇、一〇頁、および石田幹之助、「欧人の支那研究」、『現代史学大系』、第八巻、昭和七年、四七頁参照) フェルナンドは八四四—四八年説 (Fernand, G.; Textes Géographiques Arabes, I. P. 21) ハルトマンは八四六年説 (Hartmann in Encycl. of Islam, I, P. 842) ビーズレイは八八一—八四年説 (Beazley, C.R.; The Dawn of Modern Geography. P. 425) ストランジェは八六四年説 (Le Strange; The Lands of the Eastern Caliphate, P. 63) 藤本氏はイスラム百科辞典、又はデ・フーヨに依つてであろうか、「八四六年に着手され、死ぬまで続けられた」と言う。デ・フーヨについては Richthofen, F. F. v.; China, I. P. 558 参照、なおパスケヴィチは理由を示さずに九世紀半、ヴェルナドスキーも同様にして八四六—四七年とする。(Paszkiewicz; The Origin of Russia, pp. 118, 172.; Vernadsky; Ancient Russia P. 208(A. D. 846), P. 283(A. D. 847), idem, The Origins of Russia, P. 192(A. D. 847))

(54) 上記の註を見ても分るように、それが九世紀中頃の作であることは動かないであろう。(桑原「イブン・コルダードベーに見えたる支那貿易港、殊にジャンフゥとカンツゥに就いて」、(上)『史学講誌』三〇の一〇、一〇一四頁、藤田豊八「イブン・コルダベーのカントゥに就て」、『史学雑誌』二七の六、六八一頁)

(55) Vernadsky; Ancient Russia, P. 283

(56) Vernadsky; The Origins of Russia, 1959 のこと、Ancient Russia は 1946

(57) Vernadsky; Ancient Russia, P. 305: idem, The Origins of Russia, pp. 185-6

(58) Vernadsky; Ancient Russia, P. 304: idem, The Origins of Russia, P. 183

(59) 木崎、『原初年代記考』の一、二二頁、Likhachev; P. 18 Rus. trans., ibid P. 214: Cross; Chronicle, P. 59: 除村訳一八頁。

(60) 木崎、『原初年代記考』その一、一七頁、Likhachev; P.V. P. 53 P. 12, Rus. trans., ibid pp. 207-8, Cross; Chronicle, L., I, 除村訳六頁。

(61) Paszkiewicz; The Origin of Russia, P. 420

The Historical Image of the Chartist Movement

——especially in Lancashire——

by

Kenji Muraoka

To the question 'what is the Chartist Movement?', people answered 'the labour-class movement requiring the realization of the People's Charter' according to an ordinary definition of school textbooks. This movement was not merely the political movement of labour class but essentially the social-economic movement, which is clear by remembering the early nineteenth century in England as a violent period of the industrial revolution. Beyond this ordinary textbook interpretation a certain viewpoint which may be generally accepted is Lenin's; that is, 'the first broad and politically organized proletarian-revolutionary movement of the masses'. But when we step into the actual process of the Chartist Movement, this Lenin's categorical definition does not prove a correct image of Chartism. According to this observation, we have to conclude that 'the historical image of the Chartist Movement' is still unsettled.

This article, from this point of view, tries to describe a concrete historical image of the movement, forcussing attention mainly upon Lancashire, the central district in the Industrial Revolution.

On the passage of Ibn-Khurdadhbih Concerning the Term "Rus'"

by

Ryôhei Kisaki

An Arabic writer of the middle of the 9th century, Ibn-Khurdadhbih relates in his work "The Routes and Kingdom" (Kitab-al-Masalik Wal-Mamalik) as follows: "The Rus' merchants are a sort of Saqaliba." The anti-Normanists in the so-called "Problem of Rus'" assume the term "Saqaliba" in this passage as the Slaves exclusively, and assert that Khurdadhbih speaks distinctly that the Rus'

were Slavs. But if the term "Saqaliba" were applied to the Slavs only, Ibn-Khurdadhbih's description is contradictory to that of the other Arabic writers, such as e.g. Ibn-Fadhlan, Ibn-Rusta, Mas'udi, al-Istakhri, Gardezi, etc. In this case we could not regard Khurdadhbih as a credible source. And if that term had a wider meaning, we could not prove by this Khnrdadhbih's description that the Rus' were equal to the Slaves.

Some Remarks on the "*Shibata Takenaka Ôkô Nissai* 柴田剛中欧行日載"

by

Susumu Kimizuka

In order to postpone the foreigner's residing period in *Edo* 江戸 and *Osaka* and to open the ports of *Niigata* 新潟 and *Hyôgo* 兵庫, the party, leaded by *Yasunori Takeuchi* 竹内保徳, was sent to the six countries in Europe, such as France, England, Holland, Prussia, Russia and Portugal, from 1862 to 1863; this meant the first travel to Europe after a long national isolation and the lmportant mission of investigating the condition of these countries with which our country had many diplomatic problems.

According to the diary of *Takenaka Shibata,* chief attendant, we can divide their whole travel into four parts, (1) the outward travel, (2) the round travel of the five countries beside Portugal, (3) re-entrance into Prussia and France, and (4) the return travel. This article treats the section (1) the outward travel. After the sailing from *Edo* 江戸 on January 21st, through *Nagasaki* 長崎, they stayed for a week in Hong Kong to investigate conditions there, this long stay which was under the influence of the Civil war in America. And then, passing Singapore at first and other points for the English advance to Asia, through Egypt of the then Turkish territory (under the construction of Suez Canal), they reached Marseilles on April 3rd. On the way they investigated in Singapore they investigated the Boxer Rebellion and in Egypt and Malta some trouble happened